

## 「原の論文」を基に

清水 禮 壽\*

私は麻酔学の講義や学生の bedside learning を指導するにあたって、欧米の textbook を用いている。理由はある事象を口述または記述する際に、その事象が誰によってどのような方法で導びかれたかが日本語の多くの参考書よりも明確にできるからである。

今年の卒業試験に“本態性高血圧症では心拍出量は減少しない”，“本態性高血圧症では循環血液量は減少しない”という選択肢の入った問題を出題した。これらの選択肢の記述内容はいずれも誤りなのである (Lund-Johansen, P. Hemodynamics in essential hypertension. Clin. Sci., 59: 343S, 1980) が、よく勉強している学生数名がそれぞれ医師国家試験対策用の日本語の参考書を持参して、本態性高血圧症では心拍出量、循環血液量とも増加すると記述してある部分を指摘して、これらの選択肢は正しいのではないかと抗議しにきた。私は上記の論文と、やはり同じ著者が分担執筆した Hemodynamic changes in late hypertension; in Hypertension in the Young and Old (eds G. Onesti and K.E. Kim), 1981, p239. New York: Grune and Stratton を提示して、本態性高血圧症においては、心拍出量は初期には増加するが、いずれは減少すること、循環血液量は正常か軽度で減少することが証明されているから、これらの選択肢の記述内容は誤りであると解説した。しかし、学生達は彼等の持参したどの本にも心拍出量、循環血液量のいずれも増加するとは書いてないし、循環血液量がたとえ軽度であっても減少しているときに、心拍出量が増加しているという事実はあり得ないのではないかと尤もと思われる反論をしてきた。私は Lund-Johansen もいっているように、本態性

高血圧症では容量血管の緊張が増大して循環血液量が中心循環に再分配されるため、初期には Frank-Starling のメカニズムによって心拍出量が保たれたり、増加したりするのでであると解説した。学生達は一応納得したようではあったが、彼等の持参した本の著者または編者はいずれも高名な先生方であるから記述内容は正しいのではないかと執拗に主張した。そこで私はその先生方は自分達の research に基づいてそのような記述をしているのか、または「原の論文」を明記しているのかと学生達に問い糾した。学生達はそれは分からないが、国家試験ではこの先生方の記述が正しいということになるのではないかと言い、ついには、先生は欧米の textbook をよく使われるが、国家試験の実情にあった講義をして頂きたいと言出した。私は怒りを覚えながら、ここは医学を学んだり、教えたりするところであり、国家試験の予備校ではない。したがって、今後とも方針を変えるつもりはないといって学生達にはお引き取り頂いた。

現在、各分野の参考書は屋上屋を架すように出版されている。それはそれなりの需要があるからであろうが、内容の明らかに誤った記述が別の参考書にそのまま記載されていることもまれではない。これは、参考書を書く人がそこに記述されている事象に関する「原の論文」に目を通すこともなく、安易に他人の書いたものをそのまま借用することに由るものであろう。ある論文の巻、号、頁、年などが十数年にわたって誤ったまま多くの論文に引用されていたという話もよく耳にする。

私自身もかねがね物を書くことは恥をかくことに通じると痛感している。

論文や参考書の中である事象を記述する場合には、その原となる一流の論文に当たる労を惜しんではならない。

\*自治医科大学麻酔科学